

発表者による相互討論（抄）

司会者 八 木 誠

〔初めに、各々の発表者から他の発表者へのコメントを含む質問が出された。以下は、それをうけての回答である。〕

八木洋 川村先生は、宗教と文化についてどうお考えかと再度質問されました。私は、宗教を直接経験と押えます。そして宗教と文化とは、表現を介した直接経験とその発展との間の円過課程と見ます。直接経験から表現、つまり文化のいろいろな層があり、それを介して直接経験に帰ってこなければ、文化は枯渇する。そしてその全体を、コミュニケーションの構造と捉えることができるのではないかと思う。

田中先生は、ソシユールのいう「シニフィエのない、コード化される以前の絶えざる動き、戯れるシニフィアン」を、道元の表わしたかったことと近いのではないかといわれました。

私は、ソシユールのいうのは、自由にシニフィアンがシニフィエを無限に呼び出してくることをいっていると思っています。それを、新しい文化を創造していく場として考えたいのです。ハイジック先生は、イッヒヒがドクやエスに対して多数の自我となるが、それと一つであるべき真実の自己（セルフ）とはどういう関係になるのか、と質問されました。イエスはいつもある一つのイッヒヒへのこだわりを壊すような言葉を発します。それを発する場所がどこか、が非常に大切な問題だと思っています。

川村 初めに、昨日の全体の解釈に関して、私は、部分を集めた全体ではなくて、あらゆる言語表現を超えた絶対の超越の次元、十牛図では第八図の円相、そこで宗教・言葉・自己同一性・真実在が一つであるような世界としての全体を考

えています。上田先生のいわれた、七色の光が分かれる以前の太陽の光そのものところです。

さて、八木（洋）先生は、直接経験の場そのものが、人間がそこで初めて対話的な、関係的な存在として開かれてくる開けの場であり、そこを原コミュニケーションの場と呼びたいが、どうでしょうか、との質問をなさいました。その意味で、場の開けそのものを言葉といえるか、ということですが、私は、直接経験の世界は表現された言葉のもとになる原言語、上田先生のいわれる根源語の世界と見ます。そして表現された言葉が文化とすると、その間に円環構造があるということになると思います。

田中先生は、論理法則が破れるということに関して、アリストテレス論理学と異なる論理が表われるという意味なのか、本来、論理法則が、消失してないところということなのかとの質問がありました。私はやはり、いろいろな論理を出してみても包み切れない世界がどうしても出てくる、そういう世界を考えています。

ハイジック先生は、「ものとなつてものを知る」の句について、言葉以前の体験があるということを行い表わすと解釈してよいかとの質問をなさいましたが、見る自己と見られる自己とが一つのところであり、主客分裂していないところからものを見る、そういうことと考えます。そこが真実在、自己同一の世界、また原言語の世界です。

田中 川村先生は、私のいう宗教否定に関し、円熟すれば宗教は要らない、という方向で理解してもよいか、とのことでしたが、たとえば、昨日、啓示に対する応答形態が問題になりました。啓示と共同体性においてうけるキリスト教には、祭司と預言者の二つの形があります。預言者は、組織・制度を全面否定しますが、この系統を、宗教の否定といったのです。これに対し、覚は個人的ではないのか。サンガがあっても、それは二次的だと思います。そうすると、仏教で、自分の組織を批判するとき、覚に基づいての批判ではないのでしょうか。この点、仏教の方にお聞きしたいです。

ハイジック 八木洋先生は、シンボル能力は対話的と解してもよいかと質問されましたが、シンボルは自他の区別によって成立するので、そういえると思います。ただ、一般に人間と人間より、人間と大自然との間の象徴がふつうだと思います。

川村先生は、シンボルのマイナス面をどう考えるかと質問されましたが、シンボルを、*「邪魔になった確実さ」*を打破するところで用いられている面を見ていくことが重要だと思います。

田中先生は、私が、木村英一先生の「東洋の哲学は象徴主義でなく表現主義である」旨の句を引用し、また「中国の哲学の中で、イメージがかなり低い位置を占めていた」と述べたことに、種々反論されました。私は、この辺は、素人です。

ただ、木村先生のいわれることも一応はあたっていているとして、それは何故か、ということ考えたかったです。そして何故、科学ができなかったのか、も、同じ表裏の問題なのでしょう。それから、田中先生は、ミサの際のパンとブドウ酒を、プロテスタントの牧師が、式が終わったらただのパンなのだからとゴミ箱へ捨ててしまった、という話を出され、そのパンをどうするか、と問われました。田中先生は、人に悔られて捨てられたそれこそ、キリストの象徴だから、拾い出して聖体として頂くといわれました。私も、用が終わったら使い捨てにするというのは、非常に現代的な意識であり、それはカトリック的でも人間的でもないと思います。

〔以下には、全体で討論がなされた。〕

上田 八木(洋)先生の出された直接経験にソシユールのランガージュの根本をみてよいかという問題との関連ですが、西田の純粋経験は、自発自展する。それは、一から二へ、という方向です。しかし西田の考え方自身が発展して、本来、もともと一にして二、二にして一というのが本当だとした。そこに、一の否定としての二、二の否定としての一の、非連続性の契機をはっきり見ていく。それが西田の絶対矛盾的自己同一で、これは一挙にいわなければならぬ。それが場所と結びついている。ですから、そこから見直すと、純粋経験は、場所としての開けの自覚というふうに見直すこ

とができる。

八木洋 そうすると、覚の覚とは何だろう。

上田 八木誠一先生の覚の覚とは、西田のいう自覚になる。秋月 西田がくりかえし言っていることは場所のものとなって見、行うということ。そこから行うのが禅であり、八木さんと対談していると、キリスト教も同じことを言っているのだという感想をもつわけです。覚の覚というときの二番目の覚が問題で、それが場所のものとなって見ることであればよい。しかし、無分別の分別とはいいながら、また分別に流されてしまつて、対象論理に落ちてしまうのが我々のものの言い方のくせなので、無分別の分別をはずしてはならない。また、禅的にいうと体験で終わりですが、ここまではそれですませるのではなく、場所的思推を行うということで論じるべきです。

八木誠 覚の反省というと、自分の意識を対象にして眺めているように聞こえる。それがいやで、変な言葉づかいしているのです。

……

上田 啓示の共同体性に対し覚の個人性が言われたが、しかし覚のところと言うとすると個人的ともいえないし、共同的ともいえない。その次ですね。それは自覚ということに

なるが、その時には同時に覚他である。自覚というときには同時にもう自覚覚他ということが一緒に言われるような自覚である。その「他」には、汝だけでなく、彼が入ってくる、無辺の衆生が出てくる。サンガが最低四人で成立するというのは、その無辺性と表しているのではないか。仏教は、「我らとともに」という「我ら」を言わない。それは我といっても我なしであり、我々というときも、我々なしが同時にある、ということを考えようとするからではないか。

八木誠 キリスト教でも我なしということをいうと思うけれど、それは個人の中にキリストが生きているという形であり、しかも教会全体がキリストの体で、教会全体の中にキリストが生きており、あるいはキリストの中に教会全体が生きている。そういう面がはつきり出てくるので、原罪と救済など、神の民の歴史が出てくる。良い悪いは別にして、そうしたちがいは見られると思う。

秋月 仏教にも仏国土を浄めるということがある。また、社会性を重視した日蓮さんなども出ている。また、一切衆生とはいっても、森本省念老師にとっては目の前に来る一人一人が一切衆生であった。それが本当ではないだろうか。

一つ言っておくと、直接経験があって、原言語があって、そこから言葉が出るという見方では、西田哲学にはならない。「くから出る」のではなく、場所から見るといことがどこまでも大切である。場所的論理というものがやはりあるわけ

です。

八木誠 場所で二が二ということが成り立っているわけですよ。原言語で、原コミュニケーションが成り立つと、八木洋一さんは言いたいのですね。

……

〔この他、念仏を宗教の言語としてどう見るか、等々の興味深い討論がなされた。〕

高階瓏仙禅師著

清談金剛經

定価五〇〇円
送料二五〇円

平易に説いた金剛經の註解

発行所 中央仏教社

秋田県河辺郡河辺町和田